

# 中井正一と概念の問題

門 部 昌 志

Le problème du concept chez Masakazu NAKAI

Masashi MOMBE

## 1. はじめに

1930年、美学者中井正一（1900-1952）は2編の「機能概念の美学への寄与」を発表する。この論考において中井は、『実体概念と関数概念』（1910年）におけるカッシーラーの議論を前提としつつ、「機能概念」を導入し、独自の仕方であらう美学上の諸問題に応用した。中井における機能概念の問題系は、筆者が長期的に論じてきた主題である。中井は、従来の概念形成論を論難したのち、機能概念を導入した。これまで筆者は、中井の機能概念に、関係論的思考や固定的な二分法への批判、さらには相互転換の論理が見出だせる点を論じてきた<sup>1</sup>。中井が機能概念を導入したのは、実体概念を前提とする伝統的な概念形成の理論が問題を孕んでいたと彼が考えたからである。機能概念導入の前提として中井によってなされた伝統的な概念形成理論への批判は、私見では、カントを念頭に置いてなされたものと思われる。

以下では、まず、概念に関わる問題に着目しながら中井による議論の背景を辿る。彼が機能概念の導入やその応用を試みた1930年代の諸論考を熟読すれば、概ねの論点をつかむことは可能である。しかし、既に彼が消化してしまい、明示的に言及しない理論家が時として重要となる。このような事情を考慮し、本稿では、機能概念導入の前後も考慮する。最初期の中井は、カントの第三批判を研究していた。概念は、判断力をめぐる議論における諸前提の一部をなすことから、中井における機能概念導入は、最初期の中井の論考「カント第三批判序文前稿について」（1927年）と部分的に異なる方向性を打ち出そうとしたものと推察される。新機軸の模索は、機能概念の導入だけではない。機能概念導入前後における中井の論考には、ヘーゲルやハイデガー、そしてマルクスらに由来する用語が散見される。1936年の「委員会の論理」<sup>2</sup>に至っては、機能概念が相対化されるのみならず、概念論が社会的広がりの中で論じられるようになる。本稿は、初期中井における概念形成論の問題の導入と転換、発展を追うことにより、中井の「委員会の論理」に概念論<sup>3</sup>との関連から光を照射する試みである。単純化された記述となることを回避するために、顕著な変化のみならず、より潜在的な探究をも考慮する。

以下では、第一に、最初期の中井がカントについて論じたことを確認する。これは、中井の機能概念論を読むための準備的作業である。第二は、機能概念導入期の考察である。当時の中井は、

---

1 拙稿「中井正一再考——集团的思惟の機構について——」、『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第3号、2002年、137-146頁。

2 「委員会の論理」（1936年）は、上、中、下に分割されて発表され、当初は、サブタイトル（「一つの草稿として」）が付されていた。本稿では、タイトルを略記することがある。なお、この論考が掲載された『世界文化』の三冊の復刻版は、1975年に小学館より刊行された。

3 「概念形成論」ではやや語義が限定されるため、「概念論」と表記することがある。本稿では中井正一における概念論に関して用いる。

カントの継承というよりむしろ、部分的には、それを乗り越える議論を模索していたような観がある。ただし、最初期の問題系は目立たない形で継続的に発展させられている。また、晩年の中井が再びカントを論じたことも忘却すべきではない。第三は、機能概念導入と美学への応用を果たした中井が、機能概念の技術への応用を積極的に行う一方、機能概念の抽象性を批判する時期の考察である。「委員会の論理」(1936年)で中井は、資本主義社会における概念のあり方を論じる。カント第三批判序文前稿を論じた時期と比較すれば、概念は社会的な側面から論じられている。以下では、中井における概念論の問題系を浮彫にするとともに、「委員会の論理」に新たな光を照射することにした。

## 2. 諸前提

### 2.1 機能概念の導入まで——最初期中井正一

フォルケルトの悲劇論や三木のパスカル論に対する書評を発表した後、中井正一は、1927年に「カント第三批判序文前稿について」(『哲学研究』7月号)を発表する。カントによるこの「前稿」は、今日、「判断力批判への第一序論」として知られている。長過ぎた第一序論は、カント自身によって廃棄され、その後にかかれた序論が『判断力批判』に組み込まれる(以下、第二序論とする)。第一序論に関しては、従来、ベックによって圧縮されたヴァージョンが知られてきた。しかし、オットー・ビュークの編集した、カッシーラー版カント全集に「判断力批判への第一序論」全文が掲載される。後者については、田辺元『カントの目的論』(1924年)でも言及されている<sup>4</sup>。「カント第三批判序文前稿について」で中井は、第一序論(「第三批判序文前稿」)を、ベック稿、さらには第二序論(「第三批判本序」)と比較しつつ、要点を整理した。中井が注目するのはベック稿で省略された第一序論の記述であり、技術や自然の技術(技巧)<sup>5</sup>である。「カント第三批判序文前稿について」で中井は、第一序論のⅡにおける概念と判断力の関係にも言及する。彼は詳述していないが、カントにおいて、普遍(規則)の認識能力である「悟性」は対象の概念を与え、普遍によって特殊なものも規定する「理性」は対象の理念を与える。普遍によって特殊を包摂する「判断力」は、概念も理念も与えず、単に他から与えられた概念のもとに包摂する能力である。仮に判断力から概念ないし規則が生じる場合、自然が人間の判断力に従う限りにおける自然の概念でなければならない。このことは、判断力から発する概念としての自然の技巧に関連する。技術と自然の技巧が論じられるのは第一序論のⅥとⅦである。自然は、あたかも技術に基づくかのように判定されることがある。中井の解釈によれば、技術は理論的と実践的の中間概念であり、それは理論的でも実践的でもない判断として自然に関係する。それは芸術におけるような評価力を通して自然対象に接する仕方を意味し、自然の評価は主観的である。判断力は自己の法則のもとに「己自身を根拠づけ」ることによって、自然を技術的(技巧的)と称する

4 田辺元『カントの目的論』岩波書店、1924年、64頁。なお、カントの目的論の現代的解釈については、次を参照。佐藤康邦『カント『判断力批判』と現代——目的論の新たな可能性を求めて——』岩波書店、2005年。日本カント協会編『カントの目的論』理想社、2002年。

5 中井の「カント第三批判序文前稿について」では「自然の技術」であるが、「機能概念の美学への寄与」(『哲学研究』)では「自然の技巧」と表記されるようになる。以下、カントに即して説明する。それによれば、実行に関する命題は「技巧的命題」である。それは、人間が存在を欲するものを実現する「技術」に関連する。ただし、カントにおいて、技巧という表現は自然に対して用いられる。というのも、自然の対象が、あたかも技術に基づいているかのように、人間によって判定されることがあるからである。自然は、技術との類比によって、技巧的であると主観的に判定される(I.カント、牧野英二訳「判断力批判への第一序論」、『カント全集9 判断力批判(下)』岩波書店、2000年、198-199頁)。なお、カッシーラーのこなれた表現も引用しておく。「あたかも自然が或る造形的意志の表現であるかのように、見なす限りにおいて、自然の技巧が存在する」(E.カッシーラー、門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修『カントの生涯と学説』みすず書房、1986年、315頁)。

ことができる<sup>6</sup>。第一序論のⅦについて、中井は、認識能力の「三つの働き」に注目する。経験的概念に必要な認識能力の働きの第一は、直観の多様の把握（「把握」）である。第二は、概念における「多様の意識的総合的統一」である。第三は、概念に相関する対象の、直観における描出（「叙説」）である。構想力において多様なものが把握され、それが悟性のある概念の描出と合致する場合、反省において、悟性と構想力は、互いの仕事を促進するために相互に合致する。対象は、判断力に対して合目的的として知覚され、この合目的性は、主観的とみなされる<sup>7</sup>。中井は、第一序論における技術概念から目的論に移る「説明的価値」を極めて重視している。第二序論に関しては、Technik 概念が顧みられる機会が稀なものとなる一方、認識の三つの場所（Feld, Boden, Gebiet）が重視されることを中井は指摘する。カントによれば、対象に関係づけられた概念は自らの「分野」を持つ。この分野で「認識が可能となる部分」は概念と認識能力の「地域」と呼ばれる。この地域において「概念が立法的である部分」は「領域」と呼ばれる<sup>8</sup>。中井は「認識の三つの場所」に関する「思想」を体系的組織化の「徹底」と見なした。

1927年に「カント第三批判序文前稿について」を『哲学研究』（7月号）に発表した後、中井は、言語や言語活動の研究に向かう。1927年の『哲学研究』（9月号）に掲載された「言語」（一～二）では、言語の「概念的」意味のみならず、幼児の「意味なき言葉」や「言語の芸術的意味」も言及された。「言語」（1928年）<sup>9</sup>の五では、逆説的かつ急進的なロマン主義者、そして言語研究の勃興への言及がある。六ではヘーゲルにおける「絶対的否定としての創造力」が注目され、「内なるものと外なるもの、直接的なる統一」について述べられる。また、哲学的問答法としてのディアレクティケーからヘーゲルのディアレクティクへ、さらには、言われる言葉から書かれたる言葉、印刷されたる言葉に至る運命への注目がある。これらの主題の詰め込まれた論考が「カント第三批判序文前稿について」の次の論文として、同著者によって書かれているのである。1929年2月号の『哲学研究』に掲載された「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」では、判断が言語活動との関連から論じられている。主に参照されるのはライナッハの否定判断論であり、「外なる言葉としての『主張』」と「内なる言葉としての『確信』」という区別が論じられる<sup>10</sup>。しかし、論考の末尾では、確信の深底において沈黙する自我が見出だされるに至って主張と確信の区別は解体される。それとともに、ハイデガーの「問い」と「隔離 Entfremdung」の意味に対する興味が示唆され、「未完」の論考は閉じられる。このように、「カント第三批判序文前稿について」を発表した後の中井は、探究の延長線上で新たな議論を展開していた。言語の研究、言語活動における判断、しかも否定判断の主題化。これらに加え、「言語」及び「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」双方の論考が、問いや自己内部の対話者などの主題に関連することも付言しておく<sup>11</sup>。

1927年の11月に遡れば、中井の師であり、岩波版カント著作集『判断力批判』の翻訳予定者であった深田康算が永眠、中井は『深田康算全集』の編集と校正に従事することとなった。植田壽蔵の「後記」によれば、編集については植田自身が「多少の協力を捧げ得る幸が与へられ

6 中井正一「カント第三批判序文前稿について」、『哲学研究』1927年7月号、79頁。

7 カント、前掲書、221頁。

8 I.カント、牧野英二訳『カント全集 8 判断力批判 上』岩波書店、1999年、19頁。

9 中井正一「言語」（三～六）『哲学研究』1928年4月号。

10 これらの論考については論じたことがある。拙稿「中井正一の言語活動論をいかに読むか」、『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』第9号、2008年12月、115-128頁。ソーシャルにおける言語と「言語活動<sup>ランゲージ</sup>」、「発言」（発声）と「聴取」の区別やライナッハの否定判断論などを踏まえた議論である。

11 三木清「問の構造」は1926年と1927年の『哲学研究』に発表された（『三木清全集 第三巻』岩波書店、1966年所収）

た」ものの、それ以外は「殆ど中井正一氏の力に依る」ものであったという。校正メンバーには、中井正一のほか、徳永郁介、富岡益五郎等がいた<sup>12</sup>。彼らは、後に理論的同人誌『美・批評』の同人となる<sup>13</sup>。1930年5月から12月にかけて『深田康算全集』の第一巻から第三巻までが、1931年6月に第四巻が岩波書店より刊行される。第一巻には、刊行予定であった『判断力批判』の翻訳未定稿が収録されていた。

1930年の『思想』（2月号）に掲載された、中井の「機械美の構造」には、既に「構成概念 Funktionsbegriff」という用語が見られ、後に機能概念と呼ばれるものの先駆的な例示が見られる<sup>14</sup>。例えば、自動車は、速力、積載量、耐久性、価格など、諸要素の複合である。運搬の道具としての目的のみならず、視覚における「美的感覚」も論じられる。機能概念を表題に掲げた彼の論考が発表されるのはこの後である。まずは、『美・批評』の創刊号（1930年9月号）に「機能概念の美学への寄与」が掲載される。論点の凝縮された短い論考で、巻頭に掲載された。その後、同じ表題を掲げた「機能概念の美学への寄与」が1930年の『哲学研究』（11月号）に掲載される。

このように、1930年は、カッシーラーの関数概念を中井が「機能概念」として本格的に導入した年である。カント第三批判の研究からカッシーラーに触発された機能概念論へ。これは、確かに、顕著な変化ではある。しかし、1930年に発表された「絵画の不安」で中井がハイデガーにしばしば言及しているように、この時期の彼は対極的な方向からの研究も行っている。ただし、機能概念導入期の中井が、以前の彼の研究を顧みなくなったわけではない。最初期の論考で扱われた問題は、やや潜在化するとはいえ、独自の仕方でも展開され、時に機能概念的思考と関連づけられることもある。例えば、1930年の諸論考、「機械美の構造」、「意味の拡張方向並にその悲劇性」、「機能概念の美学への寄与」（『哲学研究』）において自然の技巧（技術）が言及されている。さらに、「カントにおける Kritik と Doktrin の記録について」（『哲学研究』183号）が示すように<sup>15</sup>、1927年の「カント第三批判序文前稿について」で論じた内容を、1930年代初頭の中井は再考察している。この原稿は、戦後、中井自身によって改稿され、「カントにおける中間者としての構想力の記録」として1949年に発表される。この論考を考慮に入れると、中井は三編のカント論を記したことになる。それらは既に比較されており、従来の議論では、これらの論考から「媒介の論理」が取り出され、中井思想の「基軸」とされた<sup>16</sup>。本稿の一次的課題は、中井のカント論の詳細な検討ではない。以下では、機能概念導入期の論考で潜在化した問題系をも考慮しつつ、

12 植田壽蔵「後記」、『深田康算全集第一巻』岩波書店、1930年。

13 山田宗睦「《日本の思想雑誌》『美・批評』、『世界文化』、『思想』1963年8月号。

14 中井正一「機械美の構造」『思想』1930年2月号、194頁。

15 『中井正一全集第一巻』には、1930年6月号掲載と記されているが、複数の文献で1931年6月号掲載とされている。中井正一著、鈴木正編集解説『増補 美学的空間』新泉社、1982年。杉山光信『思想とその装置1 戦後啓蒙と社会科学の思想』新曜社、1983年。

16 杉山光信「言語・映画の理論と弁証法の問題——中井正一論の試み——」『思想とその装置1 戦後啓蒙と社会科学の思想』新曜社、1983年。題名には表れていないが、この論考の「二」は「思想の基軸としてのカント」である（同上、137-151頁）。指摘された要点は、第一に、第三批判序文前稿について論じた中井が技術（技巧）の説明の重要性を強調したことである。技術（技巧）に関する重要な言葉として「自然の技術」があるが、それは「主観的原理のうちにある合目的性を自然に投影し、自然のうちでそれを確認することなのだ」とされている。第二に、「カントにおける Kritik と Doktrin の記録について」では、カントが『判断力批判』で感情（判断力、構想力）を知（悟性）と意（理性）の媒介者、中間者として設定したとはどういうことなのか」が論じられた。カントに関する、中井の第二論文でより正確に把握されるこの論点が「媒介の論理」と呼ばれる。第三の論文に関しては、戦後の中井が広島で行ったカント講座との関連が指摘される。思想の基盤なきパトスをどう考えるべきか、という問題がある。この論考は、三木清による『構想力の論理』の批判を「暗に示唆」している。方向なき決断と決断を欠く過剰の意識は表裏をなす誤謬であるという。



1930年代半ば頃までに発表された中井の論考を、概念論の文脈から再読したい。

## 2.2 概念形成の理論とその背景

1930年の『美・批評』に掲載された「機能概念の美学への寄与」において中井は、アリストテレス的な形式論理学に対するカッシーラーの批判を検討している。中井は『哲学研究』11月号にも、同じタイトルではあるが、より長い論考を発表している。ここでは、後者の「機能概念の美学への寄与」に依拠しながら、概念形成論とその問題について中井が展開した議論を確認する。それによれば、従来の形式論理学における概念形成の議論では、まず、無数の性質を有する個々独立した物の存在が仮定される。そして、これらの多くの性質から、多くの物に「共通なる」性質が抽象される。そして同じ性質をもつ物を「一つの類に結合する」ことによって、概念が成立する。概念の内容が減少するにつれて、その適用範囲は拡大していく。こうして「概念角錐」が成立するが、その頂点は抽象的な「或もの」(Etwas)に至る。「内容の厳密なる一義的規定」という、科学的概念の要求に反して、概念形成の到達点は抽象性、無内容性という空虚な帰結になる<sup>17</sup>。

脚注で中井が示しているように、この議論は、カッシーラーの『実体概念と関数概念』(1910年)の第一章に由来する<sup>18</sup>。それによれば、伝統的な概念形成理論の前提は、多様な事物から共通の要素を取り出す精神の能力である。「同一の性質」を持つ対象を「ひとつの部類」にまとめあげる作業を繰り返すことにより「序列と分節」が形成される。この際、思惟は、「感性的多様」を「比較」し、「区別」する機能を果たす。「反省」は、共通する本質的特徴ないし同質の要素を諸対象から取り出す「抽象」に向かう。例えば、「木」の概念は、樅、ぶな、白樺などから共通の要素を抜き出して作られる。このような基礎のもとに、概念論の原則が成立する。比較可能な対象がある場合、その系列に対しては、それらが一致する規定を含む「類概念」が考えられる。この「類」(Gattung)において、多様な等級の「種概念」(Artbegriff)が定義される。ある一つのメルクマールを断念することで、より広い領域を考察できるようになり、一つの種からより高位の類に上昇する。これとは逆に、メルクマールを減らすのではなく、新たな内容的要素を付加することによって「類の特殊化」が進行する。

述べたように、この概念形成の理論には問題がある。特定の概念に含まれるメルクマール(内包)の量は、下位概念に下降するほど増加する一方、その概念に属する「種の個数」は減少する。これとは逆に、高位の類に上昇することによって、その概念に属している個数(外延)が増える一方、概念に含まれるメルクマール(内包)の量は減少する。この手続きを推し進めることで形成されるのが「概念ピラミッド」である。問題は、その頂上が特殊な意義を欠落させた「あるもの<sup>エトワース</sup>」となる点である。こうして、「もっとも普遍的な概念は、つまるところ、もはやならん特筆すべき特徴や規定性を持たないということになる」<sup>19</sup>。高位の概念に向かう手続きを進めていけば、科学的概念に期待される一義的な規定性とは反対に、「明確な境界が消えてゆく」ことになる。

これに加えて、形式論理学それ自身の立場から見た問題点もある。概念形成が、眼前にある諸対象から一致したメルクマールを抽出し、それ以外のものを放置することであるのなら、それが意味するのは、直観によって把握された全体に部分的な諸要素が取って代わることになる。さらに、概念が「考察の出発点にあたる特殊の事例のく消去(Aufhebung)」に過ぎず、「固有性の無化」でしかない場合、概念はその価値を喪失する。眼前の諸対象から抽出されるメルクマールは、恣

17 中井正一「機能概念の美学への寄与」、『哲学研究』1930年11月号、36-37頁。

18 カッシーラー、馬場和光訳述『実体概念と関係概念』大村書店、1926年。なお、訳述者序文には「大正十九年九月二十四日」とある。

19 E.カッシーラー、山本義隆訳『実体概念と関数概念』みすず書房、1979年、6頁。

意的なものというより全体を規定する本質的要素でなければならないのである。高位の概念が低位の概念の根拠を明示することによって、後者を理解させること、この目標が類概念を形成する従来の手順で常に達成される保証はない。桜桃ないし桜ん坊と牛肉について「赤い水けのある食べられる物体」という共通のメルクマールを設定したとしても、特殊事例の理解に寄与せず「空疎な言葉のつながり」となるにすぎないのである<sup>20</sup>。

中井からカッシーラーに遡行し、概念形成の手続きとその問題点を確認してきた。もともと、中井がカッシーラーの議論をすべて受け入れたわけではない。しかし、中井の論考に含まれた、凝縮された記述を理解するには、彼の参照した文献に遡行することが時に必要となる。カッシーラーの著作へと遡行した際に気がつくのは、「普遍」と「特殊」という用語が明示されていることである。次節で見るように、これらの用語に注目することによって概念の問題とカントの判断力とのつながりがより明確となる。

### 2.3 概念と判断力の関連

『実体概念と関数概念』(1910年)の後、カッシーラーは『カントの生涯と学説』(1918年)を刊行する。これらの著作の間には、一見、直接的な関係はないようである。しかし、後者でカントの『判断力批判』が論じられる際、カッシーラーは概念形成の問題に言及する。ここは、二つの著作の主題が交差する地点である。彼は述べる、「判断力の問題」は「概念形成の問題と重なる」と<sup>21</sup>。根拠として彼が引用するのは、『判断力批判』の序論(第二序論)の第四節における、判断力の説明及び規定的判断力と反省的判断力の区別である。孫引きを避けるため、『カント全集』から引用する。「判断力一般は、特殊なものを普遍的なもののもとに含まれているものとして考える能力である。普遍的なもの(規則・原理・法則)が与えられているとすれば、特殊なものを普遍的なもののもとに包摂する判断力は(判断力は超越論的判断力として、それらにしたがってのみあの普遍的なもののもとに包摂可能な諸条件をアプリアリに示す場合でも)、規定的である。しかし、特殊なものだけが与えられており、判断力は特殊なもののために普遍的なものを見出すべきであるとすれば、判断力はたんに反省的である」<sup>22</sup>。この箇所に対応する部分を引用した後、カッシーラーは「判断力の問題は概念形成の問題と重なる」と指摘している。両者の関連性を検討する前に、カントにおける「判断力」を確認した後、概念形成の問題との関連について考えたい。先の引用部分では、「判断力一般」は「特殊なものを普遍的なもののもとに含まれているものとして考える能力」であるとされ、規定的なものと反省的なものとに区別されている。規則・原理・法則などの普遍的なものが与えられている場合、普遍的なもののもとに特殊なものを包摂するのが「規定的判断力」である。これに対して普遍的なものが与えられておらず、「特殊なもののために普遍的なものを見出すべき」場合の判断力が「反省的判断力」と呼ばれる。

問題は、判断力と概念の関係である。カントによる判断力の説明を前提として、カッシーラーは、これら二つの問題が重複するものと述べる。「……判断力の問題は概念形成の問題と重なることになる。なぜなら、個別例を上位の類へと総括し、この類の普遍性のもとに含まれたものとして個別例を思惟すること、このことを遂行するのはまさに概念だからである」<sup>23</sup>。個別の事例を類という普遍的なもののもとに包摂し、普遍的なものに含まれたものとして特殊な個別事例を考える働きを判断力と呼ぶのだとすれば、「概念」は判断力の前提となる。

20 同上、7-8頁。

21 E.カッシーラー、門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修『カントの生涯と学説』みすず書房、1986年、294頁。

22 I.カント、牧野英二訳『カント全集 8 判断力批判上』岩波書店、1999年、26頁。

23 カッシーラー、前掲書、294頁。

判断力と概念の関連性は、カントの著作でも明示的に述べられている。「判断力批判への第一序論」のVで論じられるのは、「普遍的なもの」と「特殊なもの」、そして「概念」である。「特殊なものから普遍的なものへと高まるならば、多様なものの類別化が必要であり、言い換えれば、その各々がある規定された概念のもとにある幾つかの種属相互を比較することが必要であり、また、これらの種属が共通の徴表に関して完璧であるならば、全類別化の原理をそれ自身のうちに含む（そして最上類を形成する）概念に達するまで、これらの種属をいっそう高次の種属（類 *Gattungen*）のもとに包摂することが必要である。これに反して、完璧な区分によって特殊の概念へと下降するために普遍的概念から始めるならば、この手続きは、与えられた概念のもとでの多様なものの種別化と呼ばれ、ここでは最上類から低次の類（亜種ないし種）へ、さらに種から亜種へと進行が続けられる」<sup>24</sup>。ここでは、普遍的なものの特<sub>レ</sub>殊<sub>レ</sub>なもの<sub>レ</sub>をめぐって二つの手続きが提示されている。特殊から普遍への上昇は「多様なものの類別化」であり、普遍から特殊への下降が「多様なものの種別化」である。普遍と特殊をめぐるこれらの手続きは、カッシーラーが批判の対象とした伝統的な概念形成論の手続きと重なるように思われる<sup>25</sup>。もっとも、『実体概念と関数概念』の第一章で彼が直接的に批判したのはアリストテレスの論理学であり、その実体概念であった。カントについては、その第一章で、アリストテレスの論理学における概念形成論への批判が着手される前に、僅かに言及されていたにすぎない<sup>26</sup>。カッシーラーが「伝統的な論理学の理論」を批判する際、判断力をめぐるカントの議論が暗黙の批判対象であったのか、あるいはカッシーラーの『実体概念と関数概念』はカントの超克を意味するのか<sup>27</sup>。これらの問いはカッシーラー研究、あるいはカント研究のものであろう。確認したいのは、そもそも思考それ自体が「概念による認識」<sup>28</sup>であることに加え、「概念」が判断力論の一前提だということである。

中井の「第三批判序文前稿について」では、『判断力批判』の第一序論と第二序論、ベック稿の比較に主眼が置かれており、類別化と種別化については詳述されていない。ただ、確認しておきたいのは、「機能概念の美学への寄与」で伝統的な概念形成の理論を批判する前に、中井が「判断力批判への第一序論」に関する論考を執筆した点である。伝統的な概念形成の理論を批判する前に、中井は、普遍的概念と特殊の概念をめぐる二重の運動についての、第一序論におけるカントの記述を読んでいたはずである。

「カント第三批判序文前稿について」のなかで中井は、「判断力の概念が単なる意識現象の反省によつて導かれたにすぎないと誤解される危険性」について述べている<sup>29</sup>。判断力が意識現象に

24 I.カント、牧野英二訳「判断力批判への第一序論」、『カント全集9 判断力批判（下）』岩波書店、2000年、214頁。

25 ただし、カントにおいては、自然が自らを種別化するとされている。「……自然は、ある種の原理……にしたがって自然自身を種別化する」と言うことができる」（同上、214頁）

26 「この分野〔形式論理学——引用者注〕においては恒常的で確実な学の歩みが終局的に達成されているというカントの判断が、立証され確立されるように思われてきた。この観点から見れば、論理学がアリストテレスの時代以来、後退することも進歩することもできなかったというより広い考察さえもが、論理学に固有の確実さの証と見なされざるをえなかった」（E.カッシーラー、山本義隆訳『実体概念と関数概念』みすず書房、1979年、3頁）

27 『実体概念と関数概念』の後に刊行された『カントの生涯と学説』の邦訳では、カッシーラーによる「合目的性」解釈に、「機能」という言葉が用いられている。彼によると、18世紀の言語使用における「合目的性」は、広い意味で用いられており、それは「多様なものの諸部分の一つの統一へと調和していること」に関する一般的表现であった。各部分が他の部分に調和した関係において、全体は単なる「集積」ではなく「体系」であり、「この体系の中で各項は固有の機能を所有」している。カッシーラーにとって、「カントの『合目的性』概念の本質契機をなす」のは「諸部分の緊密な結合と相互関係」である。E.カッシーラー、門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修『カントの生涯と学説』みすず書房、1986年、305-307頁。

28 I.カント、宇都宮芳明監訳『純粋理性批判上』以文社、2004年、132頁。

限定されたものではないという彼の論点は興味深い。これに関して、先の二つの運動が、概念のみで完結するのではなく、直観と関連する点について確認したい。第一序論の注解を記したメルテンスによれば、普遍的概念には概念階層が含まれている。概念階層は類概念と種概念からなり、概念間には水平な関係と垂直な関係がある。メルテンスによれば、第一序論においてカントは、概念的—普遍的なものとの経験的—特殊なものとの関連を、類と種との従属という論理的関係とした。述べたように、普遍的なものとの特殊なものとの関係には二重の運動がある。一方において、上昇する運動は、概念に基づきながらも最終的には「無内容」にまで到達する。しかし、下降の運動は、直観されるにすぎず、これ以上は語り得ない「個体」に至る。普遍的なものとの特殊なものとの関係は、概念のみで完結するものではないのである。この場合、両者は概念と直観との関係となる。しかし、「概念的な認識としての哲学」は、普遍的な概念のもとに包摂される限りで特殊なものを対象にしうる。それは反省的判断力という機能を通して把握される<sup>30</sup>。

判断力は、概念のみならず直観にも関連する。この点は、反省的判断力を下位区分した際により明確になる。反省的判断力には、概念を前提としない美感的判断力と概念を前提とする目的論的判断力の二種類があるからである。まず、美感的判断は、客観についての概念に先行する判断であり、対象についての概念を前提としていない。例えば、この葡萄酒の味は快適である、という判断の場合、その根拠は感覚であり、快と不快の感情である。美感的判断の述語は、客観についての概念ではないのである。

これに対して、目的論的判断は概念が前提となる。この目的論的判断は、「ある自然産物の概念を、それがなんであるかということにしたがって、それがなんであるべきかということと比較する」。ある自然産物の可能性を判定する際、その根底にあるのは、目的についての特定の概念である。例えば、私たちは、眼で見ることを経験する。内的なものであれ、外的なものであれ、眼の構造は、その可能な使用条件と機械的諸法則に従う原因性を含んでいる。眼については、「見るために役立つべきであった」と判断し、眼の形式と構造のなかに何らかの必然性を考えることができる。この必然性は概念に従うものであり、この概念があつてこそ、自然産物の可能性を判定することができる<sup>31</sup>。

特殊から普遍へと向かう反省的判断力に関連して、概念に先行する美感的判断力、さらに目的についての概念を根底に置いた目的論的判断力という区分を確認した。これらについて述べたのは、第一に、本稿は概念論を主題としているため、概念によって全てを語りうるような印象を生み出すことを筆者が懸念しているからである。第二に、後者の目的論的判断力は、中井の機能概念論との関連で興味深い論点となる。彼が機能概念を展開する際、しばしば技術的道具の「目的」を論じているからである。この点について論じる前に、実体的な概念形成と機能概念について再検討することにしたい。

### 3. 中井における機能概念

#### 3.1 「機能概念の美学への寄与」

1930年、『美・批評』の9月号において中井は、「機能概念の美学への寄与」を発表する。述べたように、この論考は、同年11月号の『哲学研究』に掲載される同名の論文よりも短い、素

29 中井正一「カント第三批序文前稿について」、『哲学研究』1927年7月号、78頁。

30 H.メルテンス著、副島善道訳『カント『第一序論』の注解』行路社、1989年、81-82頁。なお、メルテンスによれば、「種別化という下降の運動」を、カントは「自然自体に与えている」。

31 I.カント、牧野英二訳「判断力批判への第一序論」、『カント全集9判断力批判(下)』岩波書店、2000年、246-247頁。



描的なものである。この論考で中井は、「カント哲学のよき修正者」としてカッシーラーに言及しつつ、彼によって発せられた「形式論理の危険性」についての「よき警告」を検討すると述べている<sup>32</sup>。従来の形式論理学の立場では、多くの物に「共通なる」性質を抽象して概念を形成する。しかし「厳密な一義的規定」という科学的概念の期待は果されることはない。中井は述べる。最終的には「其目標に於て全く空虚なものに終るのではないであらうか」、と。概念形成について説明する際、中井は、物の存在を仮定する議論から始め、その後、記憶表象に関連した説明に移っている。まず、「多くの経験」において得られた記憶の重なりから、「或物の属性に対する一つの表象」が得られる。その表象から「共通なる性質」を描き、その「共通なる第二の表象の下に凡ての物を統一する」。問題は、記憶が重なるとはいえ、それが誰にとっても共通であるとは厳密に断言することができない点である。各人によって異なるかもしれない内容をもつ表象を同じ言葉で扱うことには危険が伴う。記憶表象に基づいて体系を構成する点において形式論理が批判される。中井は、カッシーラーに言及しつつ、このような記憶表象に基づく実体概念に「構成概念」フンクチオンスベグリフを対置する。記憶表象に基づいた形式論理に代わる概念構成とは、「法則的關係を分析して単純なる関係型 Relationstypus に還元する事」であり、典型と構成法則を高次の順列に総合することである。要素は「互に規定し合ひ関連の体系に融合するところの函数形」と見なされる<sup>33</sup>。中井が明示的に述べているわけではないとはいえ、筆者は、この記述が関係論的だと考えている。さらに、機能論理的な思考は従来の美学における「多様の統一」の議論に対比されている。「多様の統一では統一さるゝ要素は被統一内容であつて、何等能動的力のない素材にしかすぎない」。これに対して、機能論理においては、各要素は相互に規定しあうフンクチオンなのであり、要素の複合が「はじめて一つの概念を構成する」<sup>34</sup>。この論考には、「多様の統一の議論」の弱さなど、カント批判を思わせる記述があることに留意したい。

『美・批評』の「機能概念の美学への寄与」では、実体概念に基づく概念形成理論の批判と機能概念が論じられた。その後に発表された『哲学研究』における「機能概念の美学への寄与」でも、実体概念的な概念形成の抽象性が批判され、機能概念的思考が強調される。「物」とは「関係以前の独立な存在」ではなく、「機能的関係によつてのみその全体の内容を得るもの」である、と。『哲学研究』における「機能概念の美学への寄与」では、これ以外にも、自我や身体、感情移入など数多くの主題が、機能概念的考え方から——今日における関係論的思考に対応する——論じられている。様々なアイディアの盛り込まれたこの論考の主題を全て扱うことはできないため、ここでは論点を限定したい。

第一に、論考の後半で言及される「自然の技巧」について。これは、中井の「カント第三批判序文前稿について」で言及された主題である。人為的なものでなくとも、自然の所産が、あたかも技術に基づくかのように見なされ、技巧的であると主観的に判定されることがある。中井の説明によれば、「自然の技巧」は、主観が認識すべき現象それ自体に「理性的合法則性が内在する事」であり、その反省を通して美的感情が構成される。このような意味で、「自然の技巧」は「理論的」と「実践的」の中間者として重要性を持つ。言い換えれば、それは「素材の理性的合法則性への信頼と直観」において重要性をもつ。ただし、「自然の技巧」が再論されるとはいえ、この論考では、「外なる自然」のみならず、「内なる自然」が想定されている。後者は、人間の身体を含む。「機能概念の美学への寄与」には、同年、中井が「スポーツの美的要素」で展開した議論

32 中井正一「機能概念の美学への寄与」『美・批評』1930年9月号、2頁。

33 同上、3-4頁。

34 同上、5頁。

が組み込まれており、内なる「自然の技巧」が論じられているのである。それは、身体内部の感覚ないし内感に、例えば、舞踊や演奏、作法そしてスポーツなどといった筋肉操作の「イキ、コツ、呼吸、等のもつ心境」に関連する。「筋肉が、筋肉自らの行為をその内面の神経をもつて評価し、そこに見出す深い合法則性を端的なる反省をもつて把握すること、そこに『自然の技巧』への真に純粋なる直感があると云ふべきであらう」。芸術やスポーツにおける技巧や腕には、内なる「自然の技巧」ないし「筋肉操作の洗練性への深い信頼」があり、それらを可能にするのが訓練や練習、そして慣れである。中井は、二つの「自然の技巧」を対比するのみならず、美的創作を論じながら、双方を関連づける。彼によれば、人間の創作活動が生み出す美は、外なる「自然の技巧」が内なる「自然の技巧」を通過することによって生み出される。これが自然美から芸術美を区別する点である。独自の仕方では拡張された「自然の技巧」に関するこの議論の前段では、実は、機能概念的な身体論が展開されていた。「生物的構成」としての人間身体は「無限の機能の複合体」でもある。道具や機械は、人間身体の機能を補い、倍加する構成体であり、身体構成は社会的集団構成に浸潤する。中井は、外なる「自然の技巧」に加えて内なる「自然の技巧」を論じた。その前提は、道具や機械によって機能を補足し拡大された諸機能の複合体という身体観であった。機能概念的思考と「カント的」な問題の応用が絡み合っているかのようなのである。これに加え、「絵画の不安」で扱われた存在論的な問題も、「機能概念の美学への寄与」に組み込まれている。この論考では、機能概念の導入後（後半部分に対応する）、同時期中井自身の展開した多様な論点が連結されている。それらの論点が前半部分に還流する可能性を考えれば、この論考それ自体が相互に規定しあう部分の複合体のように思われてくる。

第二に、注目したいのは、概念論の文脈に関連する論点である。主観と客観の概念など、形而上学における固定的な二分法に対して、「函数的関連のもとにある分離すべからざる要素」を分離し、「物的対象」として扱うことを中井が批判したことである<sup>35</sup>。かわりに提示されるのは、「相対的な転換的ヒエラルキヤ」である。例えば、主客未分の直接経験について考えてみよう。この経験を反省する場合、それが反省であるからには観察点が前提となる。観察点があるとすれば、体験は客観の概念に属することになる。主観と客観の分裂である。さらに、認識の「発展」を考える場合、制限される範囲で妥当するものと拡大した範囲で妥当するものが現れる。認識における変化的要素と不変的要素である。変化的要素は主観的で「個物的特殊条件」に関連するが、不変的ないし恒常的要素は客観的であるとされる。ただし、これらは、固定的な二分法批判の見地から「相対的な転換的ヒエラルキヤ」を構成する。つまり、絶対的に変化的なもの、絶対的に恒常的なものという対立としてではなく、比較される物に応じて、変化的なもの、恒常的なものとなるのである。カッシーラーにとって、「現在の状態は過去のそれに対して客観的と考へられると同時に、現在の状態は未来のそれに比して主観的と考へられる。即その間には函数的関係が成立するのみである」<sup>36</sup>。ただし、ある法則がより広範な領域に妥当する法則によって置き換えられる場合、客観的なものが完全に主観的なものとなり、あらゆる客観性を喪失したわけではない。かつては無制約的に妥当していた法則が一定の条件の範囲へと制限されたと考えられるのである。これが「妥当の階段性」と呼ばれる。

『哲学研究』における「機能概念の美学への寄与」では、実体概念から機能概念への移行が説かれるとともに、主観／客観という固定的な二分法への批判がなされている。これら二つの論点が単に同時期の論考で展開されたというのではなく、機能概念導入の帰結として展開されたこと

35 固定的な二分法への批判を中井は唯物論の一部に対しても行っている。

36 同上、44-46頁。

は興味深い。しかしながら、ここで、以下のような疑問が生じる。二分法批判を重視する場合、一方で実体概念と機能概念を対比的に論じながら、他方では機能概念への移行を強調することについての疑問である。これに関して考慮すべき第一の点は、論考の冒頭で中井が、機能概念的思考が「最終のもの」といわんとするのではないとし、機能概念的思考によって「美学の特殊問題」がどのように配列され、構成されるかを考察すると述べたことである。第二に、機能概念的思考に含意されるのは、あらゆる二分法の批判ではなく、固定的な二分法への批判だということである。例えば、「相対的な転換的ヒエラルカイヤ」や「妥当の階段性」などの言葉で説明された内容を考えると、中井は、転換的で可動的な二分法を模索していたものと思われる。1930年に実体概念の抽象性を指摘していた中井は、後に詳述するように、1930年代半ばに機能概念の抽象性を指摘する。一見、これは不可解ではあるけれども、固定的な二分法への批判ないし転換を重視する見地から考えるなら、必ずしも不自然ではない。

### 3.2 機能概念としての窓

『哲学研究』における「機能概念の美学への寄与」では、機能概念の具体例も論じられる。彼は、ロッチェに言及しながら、金属を例にして概念形成について述べる。金、銀、銅から金属の概念を作る場合、赤色ではない、黄色でもない、何らかの比重を持っていないなど、「個々の性質の消却」だけでは不十分である。むしろ、積極的に、何らかの比重や硬さ、色などを持つという考え方があるべきとする。「凡ての個々の特徴をもつて、一つの関係を決定してゐるところの、複合的要素を全体の姿を持つて捉へ」る機能概念を彼は導入しようとする。実体概念と機能概念の相違を説明する際に中井が挙げた例のうち、ここでは主に窓を取り上げる。まず、実体概念における窓は、様々な窓についての「記憶表象の重なり」が「忘却を通じての抽象化」を経て一般化されたものである。これに対して、機能概念における窓は、照明と通風、そして展望度という諸要素の複合としての構成体である。各要素のパーセンテージが増減することにより、「特殊な類型」が生み出される。ある要素の増加が他の要素の減少に通じるなど、各要素は互いに相克している。これら諸要素全体の「函数的複合」が「概念の構造」であるとされる。

窓を例とした機能概念に関しては、中井は、「壁」（1932年）や「模写論的美学的関連」（1934年）、「委員会の論理」（1936年）といった論考でも論じている。1930年における機能概念の導入から1930年代半ばまでの間、中井は存在論や唯物論を摂取しているが、機能概念についても言及しているのである。実体概念の場合、円や四角といった窓の記憶表象が概念形成の出発点である。これに対して、機能概念で問題となるのは諸機能の複合である。機能概念としての窓は、「建築技術者会議が決定した通風、展望、採光の三機能要素の複合」となる<sup>37</sup>。窓がこれら三要素の「函数的複合体」であるならば、丸さや角張っているといった形態は、概念形成にとって、もはや重要なものではない。機能概念と記憶表象に基づく概念の相違を示す更なる例は、硬質ガラスである。硬質ガラスが発展すると、支柱機能を担っていた壁全体がガラスとなり<sup>38</sup>、通風機能が建築物に委ねられることがある。この場合、壁と柱と窓が一つの機能に結合されている。こうした事態を中井は、「建築の根本機構の中により広く概念が消却されてしまふ」と表現する。確かに、実体概念の見地では、壁や柱や窓の区別は曖昧なものとなるであろう。しかし、他方では、通風、

37 中井正一「模写論的美学的関連」、『美・批評』1934年5月号、4-5頁。

38 中井正一「壁」、久野収編『中井正一全集第三巻』美術出版社、1981年、298頁。この論考では、ガラスの壁が「壁画」の役割を持つという指摘がある。なお、全集では、この論考は1932年の『光画』（6月号）に掲載されたと記されている。

展望、採光という諸機能は何らかの形で保たれており、「窓を構成する機能概念の各要素は客観的に凡ての窓の一般をそのまま保持してゐる」<sup>39</sup>。機能概念的思考の導入によって、記憶表象の重なりと忘却では把握しがたい、目的流動性ないし転換性を中井は描き出している。

「技術的道具」は、日進月歩するものである。技術的道具が複数の要素の「函数的複合体」だとすれば、各要素のパーセンテージによって、その類型が定められる。各要素は相克している。年を経るごとに、改良が加えられ、技術的道具における「標準性の進歩」が生じる。その変化は、現代なら、より一層、小刻みなものであろう<sup>40</sup>。ある生産物の機能構成に対しては、可及的に多くの人間により、「人間的目的価値についての批判」が実験的に行われる。こうして、生産物の技術的概念が「その目的の線に副つて進展する」<sup>41</sup>。新たに生産された技術的道具は、「存在する瞬間」に「新たな標準」を示す一方、その性能は批判され、より一般的な概念を示す媒介契機となる。このような技術的道具のあり方について中井は、「存在すること」によって「自らを否定して」、技術的目的を示す媒介となる現実存在と表現する。それは「生きた、動いてゐる概念」であるとされる<sup>42</sup>。

### 3.3 「委員会の論理」における技術と生産

中井は機能概念によって現象型態としての技術的道具を論じた。そればかりではなく、彼は、機能概念を応用して、労働や技術の論理、さらに生産の論理についても論じている。内なる自然の技巧が論じられた「機能概念の美学への寄与」と同様、「委員会の論理」でも、人間は自然の一部として捉えられている。ただし、「委員会の論理」では、労働が「合目的な動き」として論じられている。1927年の「カント第三批判序文前稿について」では、中井は「自然の合目的性」に言及した<sup>43</sup>。「機能概念の美学への寄与」で引用されたル・コルビュジェの文章には、「労働の苦しみ」や「人間の労働能力のけなげなる過重とその耐忍は現代における『自然』である」といった一節が含まれていた。とはいえ、労働についての記述は断片的であった。「委員会の論理」では、狭義の自然の所産を対象とする目的論とは異なり、労働を対象とした議論が展開されている。

「合目的な動き」として把握された労働は、唯物論的な生産力の構造をめぐる説明や機能概念的思考へと結合される。中井によれば、人間は、身体にそなわる「自然的諸力」、頭脳の働きを前提とした行動によって自然に働きかけ、自然を変化させる。他方、人間は、自然に働きかけることで自分自身をも変化させる。「委員会の論理」において、労働は、このような「合目的な動き」として把握される。この労働力に、労働対象と労働手段を含めたものが「人間的生産力の構造」である。労働力と労働手段は、自然に対する人間の積極的な態度に関連する。これら労働力と労働手段の特殊な連絡構造が技術である。人間は道具を用いて、「自然系列の進行」を「人間的秩序」に転換する。例えば、自然的因果律にそった水の落下という自然系列が複雑な過程を経て、「人間的秩序」すなわち「電気機械の運動」に転化される。技術によって自然系列的要素が人間的系列的秩序に結合され、「自然的進行と技術的对象の新しい必然的な秩序」が発生する。ここにおける技術は、「媒介としての技術」である。

中井の概念論にとって重要な問題は、技術が論理の領域に及ぼす影響である。自然的系列の進

39 中井正一「委員会の論理（中）——一つの草稿として——」『世界文化』1936年2月号、32頁。

40 同上、33頁。

41 中井正一「委員会の論理（下）——一つの草稿として——」『世界文化』1936年3月号、17頁。

42 中井、前掲論文、33頁。なお、32頁から33頁に及ぶ段落で窓や車艦の概念が説明される際、「生産」という言葉は用いられておらず、「存在」という言葉が幾度も用いられている。

43 中井正一「カント第三批判序文前稿について」『哲学研究』1927年7月号、95頁。



行を人間的系列に結合する媒介としての技術を考察する前に、中井は前者、すなわち「自然進行の論理」から考察する。彼によれば、「一般に類概念的な考へ方」では、判断は三つの領域に分けられる。第一は、概念と徴表の関係としての**概念性**である。第二は、理由と帰結の関係としての**理由性**である。第三は、全体と部分との関係としての**全体性**である。カントの「判断表」における判断の「関係」を想起させるこれらの議論は<sup>44</sup>、中井によって「自然進行の論理」と呼ばれている。この論理は、「函数」概念を経て、判断の記号式化に発展したとされ、カルナップらが言及される。「自然の論理」においては、現実／非現実、可能／不可能、偶然／必然などといった「図式的軸」において<sup>45</sup>、自然進行を一方向的に転換することが問題となっていた。しかし、中井によれば、技術の問題を導入した場合、論理の領域に変化が生じる。現実から非現実へ、あるいは逆に非現実から現実へ、可能から不可能へ、あるいは逆に不可能から可能へ、偶然から必然へ、あるいは逆に必然から偶然へなど、「交流的構造」となるのである。「自然の論理が一方的であり、直流的であるならば、技術の論理は相互転換的であり、交流的である」<sup>46</sup>。固定的な二分法とは異なる機能概念的思考が、このような技術の論理へと通じているように思われる。

この技術の論理に対しても、目的という言葉が用いられている。技術の論理は二つの存在領域を一方より他方へ、他方より一方へと、人間的目的的方向に向かって引き曲げるといっているのである。人間的方向へ向けて現実と非現実を相互転換するものが技術である。ただし、自然と人間の媒介である技術によって自然的系列的秩序が人間的秩序へと転換される過程が人間的目的性から離れ、他のものとなることがある。1927年に「カント第三批判序文前稿について」を発表した中井は、1936年の「委員会の論理」では、このような意味における「自己疎外性」を論じているのである<sup>47</sup>。

### 3.4 「委員会の論理」における概念の問題

中井における実体概念と機能概念に関連して、その現象形態である技術的道具と模型的議論について説明してきた。「委員会の論理」において、機能概念は、技術の論理の領域に寄与すると評価される一方、「抽象化の中に転化」したものとして批判される。この点を論じる前に、機能概念導入以降の理論的背景を補足的に述べる。2編に及ぶ「機能概念の美学への寄与」（1930年）の後、「ノイエ・ザツハリツヒカイトの美学」（1932年）では、カッシーラーとハイデガーという「極端なる反対の極限」に、中井は「連続せる曲率」を見出だす。「模写論の美学的関連」（1934年）

44 知られるように、判断の四項目（量／質／関係／様相）からなるカントの「判断表」では、判断の「関係」は三つに分けられている（定言的／仮言的／選言的）。第一の定言判断（SはPである）は「述語と主語」の関係である。ここで考察されるのは二つの「概念」である。第二の仮言判断（SならばPである）は、「理由と帰結」の関係である。考察されるのは二つの「判断」である。第三は、「区分された認識と区分によって生じた分肢全体」の関係である。考察されるのは、「相互関係にあるたくさんの判断」である。この選言判断（例えば、世界が存在するのは偶然によるか、内的な必然性によるか、外的な原因によるかのいずれかである等）は、「相互性」や全体と関連する。選言判断に含まれる各命題は認識領域の一部分をなすが、全てをあわせると領域の全体となる。選言判断には、ある命題を組み入れると別の命題が排除される「相互性」があり、「全体の中で何が真の認識かを見定めてゆく」ことになる（I.カント、宇都宮芳明監訳『純粹理性批判 上』以文社、2004年、133-136頁）。中井の場合、主語と述語の関係が概念と徴表の関係（概念性）と記されている。

45 カントの「カテゴリー表」における様相は、可能性－不可能性、現存在－非存在、必然性－偶然性からなっている。

46 中井正一「委員会の論理（中）——一つの草稿として——」『世界文化』1936年2月号、31頁。

47 ロマン的イロニーやハイデガーへの言及がなされる「文学の構成」（1930年）では「疎外」や「隔離」という言葉が用いられている。1932年以降になるとマルクスの『経済学・哲学草稿』からの影響も考慮に入れるべきであると思われる。

において中井は、実体論と機能論、存在論に加え、唯物論をも論じている。「委員会の論理」(1936年)になると、中井は、技術の論理の領域において限定的に機能概念を取り入れる一方、機能概念の「抽象化」を指摘するようになる。彼はまた、「商品化」と「専門化」が概念の世界にもたらした影響について論じている。

第一に、機能概念の抽象化について。「委員会の論理(上)」が閉じられる前の四で論じられるのは、論理学で進行する一つの傾向である。変化する現象を離れ、「論理には永遠の世界がある」という考え方が台頭する。それは、論理における厳密化や「函数」化の傾向である。「委員会の論理」で特徴的なのは、学問における傾向が、広い意味での社会的文脈から論じられる点である。中井は、機能の論理が台頭した時代について、それが「帝国主義的段階」であり、「欧州大戦へと凡ては動いてゐる」時であるという。中井によれば、「重工業的生産機構は、その生産物も亦その間に伍する人間そのものをも、その出発点よりよほど異つたものにまで導いて行つたのである」。そして「概念の世界」における変化として記されるのは、論理が、実体概念的な「記憶的表象の総合」から機能概念的な「函数的エレメントの複合構造」へと転じた、という点である。そこで生じたのは、「論理の一般大衆からの分離」である。まず、方法という局面では、専門化を経て特殊で高度化した論理と一般的な三段論法の分裂が生じる。分裂は、論理学の方法のみに生じたのではない。高度な「技術科学」によって「創出」される物の概念に関しても分裂が生じている。ある生産物の一般的な函数的概念を知っているのは専門的技術家だけとなり、それ以外の人々は、その生産物の「記憶表象のみ」を持つという分裂である。こうして、「厳密な意味での一般性は大衆からは疎外される様な構造をもつて来たのである」。中井が挙げているのは、当時における車の例である。例えば、1936年型フォードの「一般的概念」<sup>48</sup>を持つのは「専門技師の委員会」であるのに対して、それ以外の者は「感覚的記憶表象の集合」を持つのみである。こうして、「大衆はその生産物に対してその一般概念から疎外されて只表象のみをもつ」という矛盾の直中に放置されることになる<sup>49</sup>。

第二は「商品性」を持つ「存在の生産」が**概念構成**に及ぼした影響である。「委員会の論理(下)」の十三で論じられるのは、**売買**という経済的現象である。一見、概念と無関係だと思われがちだが、仔細に検討すればそうではない。中井はセメントを例にする。ある場所でセメントを売っているとする。彼は、「問い」の観点を応用して分析する。セメントが売られているということは、「これはセメントであるか、と人間の需要的要求に向つて**問ふ**てゐる」。機能に適合しない場合、人々が買うことはなく、それは実存在の領域より排除されてゆく。こうして、売れないものは、「非存在」を意味する。これはセメントであるか、という問い——販売に対する反応としての購買が、セメントの存在と非存在を左右する。「『である』の**可能存在**はそのまま『**がある**』の**現実存在**に連続する」。

セメントの機能構成は、人間的目的価値の観点から、多くの人によって検討されることにより、その技術的概念は目的にそって進展すると考えられる。しかし、独占資本段階では、それは大衆の批判から遊離しているという。何らかの需要があるにせよ、貨幣がなければそれは無効なものとなる。技術的概念が需要を通じて目的にそって進展するのではなく、むしろ人間的目的から遊離し、ある存在の概念が大衆的に共有されずに、人々は表象のみを持つのみとなる。これはおそらく、商品としての技術的人工物の諸機能の構成は定かではなく、その視覚的なイメージが想起できるだけという状態のことであろう。一般の人々は、道具的概念を構成する**協同性**から疎外され、与えられた生産物への表象を持つばかりである。技術的ないし道具的概念に対する人間的目的

48 中井は、「普遍的」ではなく「一般的」という用語を用いる。

49 中井正一「委員会の論理(上)——一つの草稿として——」『世界文化』1936年1月号、15-16頁。

な批判が欠如することとなる。

「委員会の論理（下）」の十四で論じられるのは、専門化が概念の世界にもたらした影響である。これが第三の点となる。労働の分割ないし分業によって、作業に必要とされる技術は部分的なものとなり、相互に独立化する。部分的で独立化した技術は、分割された作業に従事する個人の「専属機能」となる。同じことを繰り返し、注意を集中するなど経験を蓄積することにより、「最小の努力をもつて所期の利用効果を得る」。ただし、諸機能の相互的な独立化の前提は、組織的な協同であった。このような分業は学問においても進行する。中井は、専門化がもたらした弊害として、協同的統一性からの遊離という傾向を指摘する。組織的協同化の忘却と分業的専門化の突出である。「概念の一般性の研究は、全人間的相互協同研究が必要であるのに、ここでは寧ろ、個人的抜駆け的な秘密的研究の中にかくれ入るのである」。専門化の進行により、非協同性ないし無協同性という事態が生じる。ここにおいても、大衆は、概念の「一般性より疎外されて、単なる表象のみをもつ」こととなる<sup>50</sup>。

商品化による無批判性と専門化による無協同性。概念の一般性の回復と委員会の桎梏化から離脱するための論理として、中井は、提案、決議、委任、実行からなる「実践の論理」を「提案」する。計画において「目的」とされたものの「実行建設」がなされると、それは報告の対象となる。そこであらわれた誤差を現実的地盤の再検討によって是正し高次の計画へと転じること。「批判」は、この回帰的過程に位置づけられ、この分裂する過程が「主体性」とされる。「委員会の論理」は、回帰的で無限に進展する過程である。しかも、この図式は完結したものではなく、それ自身が提案されたものとして実践のなかに位置づけられている。実践の論理における出発点は提案である。それは「現実地盤の反映」であるが、歪曲される可能性もある。出発点としての提案は、欠乏性と疎外性が「大衆的潜勢力」<sup>51</sup>として求めた表現であり、言語化されて現勢力となったものである。

1936年1月から3月にかけて、中井は、理論的な同人誌『世界文化』で「委員会の論理」を発表した。同じ1936年の7月4日には、隔週刊の新聞『土曜日』が創刊されている。久野収によれば、松竹下鴨撮影所の大部屋俳優である斎藤雷太郎と『世界文化』同人が連携し、斎藤が刊行していた新聞『京都スタジオ通信』の改組によって生まれた新聞が『土曜日』である<sup>52</sup>。斎藤は「一般庶民」を読者の目標とした。創刊号の編集後記には、読者投稿を歓迎すると記されており、1937年10月5日付の『土曜日』第42号の編集後記には、「非常に沢山の投書で、紙面に載せきれない。本号は70パーセント投書で埋めた」とある。『土曜日』は、一般の読者が書き手になる新聞であった。この『土曜日』を形容する言葉としては、従来、反ファシズム文化運動という言葉が用いられてきた。確かに、中井が『土曜日』に積極的に関与した背景には、状況への危機感も含まれているのであろう。本稿で考察した彼の概念論との関連から考えた場合、『土曜日』には、概念の抽象化や無批判性、無協同性をこえる試みという側面があるものと思われる。ただし、『土曜日』という実験は、概念の世界における疎外からの回復に向かう道筋を照らし出しただけではない。読者が書く新聞としての『土曜日』は、今日から見るならば、職業的執筆者とは異なる一般読者が文化的生産に参加した一事例とも考えられる。もっとも、『土曜日』の直面した困難は、政治性を帯びた集団的な文化的生産の困難をも予示しているのかもしれないのだけれども。

50 中井正一「委員会の論理（下）——一つの草稿として——」『世界文化』1936年3月号、18-21頁。

51 中井正一の「委員会の論理」に、また、この論考における「大衆的潜勢力」に、さらには「反映」と「表現」をめぐる問題について筆者が意識した契機となった書物として次がある。竹内成明『闊達な愚者——相互性のなかの主体——』れんが書房新社、1980年。

52 『復刻版 土曜日』三一書房、1974年。

#### 4. おわりに

1920年代後半、カント第三批判の研究から出発した中井は、機能概念の導入とともに、伝統的な概念形成論や二分法的な論理から距離を取ることになった。しかし、最初期のカント論で見出された技術論や目的論は中井において独自の仕方でも展開された。「委員会の論理」において機能概念は新たな抽象に転化したとされる一方、転換的な技術の論理に活かされていた。技術は、自然と人間の媒介であり、自然的系列的秩序から人間的秩序への転換の過程である。現実と非現実、可能と不可能の対立に基づく自然進行の論理に対して技術の論理は相互転換的ないし交流的である。自然的系列的秩序から人間的秩序への転換過程は、再生産の契機によって人間的目的性から遊離し、自己疎外的な形態をとる。概念の世界では、商品化による無批判性や専門化による無協同性が生じており、人々は概念の一般性より疎外され、単なる表象をもつ状況が指摘される。「委員会の論理」で展開される概念論は「社会的」である。しかし、何が欠けている。

言語や概念を研究する一方、中井は映画も論じている。「春のコンティニューイティー」(1931年)では、「1シーン平均1.79秒」で、「0.6秒以下の影像が12乃至19連続的に出現する」映画「春」が論じられている。急テンポの「春」の映像は、絵画のように静態的ではなく音楽のようにリズムミカルで連想的である。「コンティニューイティーの論理性」(1936年)では、「利潤対象としての大衆」、資本によって創造された大衆が論じられている。段階と進歩のある技術に対し、創造における果てしない自由性をもつ芸術は、「利潤機構」に捉えられると誤謬の危険性も限らない<sup>53</sup>。しかし、『美学入門』(1951年)には、映画における協同性や人間的方向性を重視する記述がある<sup>54</sup>。レンズの見方という「物質的視覚」を持つ映画は、中井において繫辞(コブラ)を持たず、「である」と「でない」の「判断」は、「大衆の歴史的意欲の方向」ないし「歴史的主体性」に手渡される。「……切断面を連続せしめるものは……大衆の社会的な生活より生れる矛盾の欠乏感なのである」。最終的な局面でカットとカットを結合する観客は、それによって自らの方向性を見出だす。「人間は、自分が見失っていた自らの方向を、カットとカットの切断の隙虚の中に撃発し復活するのである。社会的矛盾と欠乏を媒介として、自らの本質を明るみにもたらすのである」<sup>55</sup>。「委員会の論理」や『土曜日』と交差しつつも、異なる試みがここにある。

(註) 引用に際しては、概ね旧字体を新字体に改めた。

53 中井正一「芸術に於ける媒介の問題」『思想』1947年2月号、38頁。

54 映画論は中井が戦前期から模索してきた主題であり、ここでは一瞥にとどめる。

55 中井正一『美学入門』河出書房、1951年、83-84頁。なお、奥付の著者名には「なかいしょういち」とルビがふられている。